



Title	退職にあたって
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪大学英米研究. 2021, 45, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99451
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

退職にあたって

岡田 新

奇しくも箕面キャンパスの移転の年が、私の退職の年になってしまった。間谷の箕面キャンパスとともに文字通り私の大阪大学外国語学部での生活は幕を閉じることになる。採用当時は、二部の助手として、枚方から箕面まで通い、夜間の授業を終えると帰れなくなるので免許も取った。ここから茨木の花火大会を遠望したこともある。世界時計の背後の櫟の木も、いつのまにかすっかり風格を帯びた。駐車場に向かう道の八重桜も、ほれほれとする見応えのある並木となってしまった。

人生には「まさか」という坂があるそうだ。自分の娘がイタリア語にお世話になったのも、何かの縁だ。しかし私のような人間が、思い出深いキャンパスを畳み、新しいキャンパスに移転する準備作業に汗をかく運命になるとは。全く思いもかけないことが人生には起こるものだ。振り返ってみると実にいろいろなことがあった。大学改革による一部と二部の統合、地域文化学科と国際文化学科の設立、博士課程の設置、国立大学の独立行政法人化、そして大阪大学との統合という日本の大学史上に残る大事件。目まぐるしい変化にかぶりつきの観客席で立ち会ってきた。どれも膨大なエネルギーを費やして、難産の末ようやく掴み取った「改革」であった。悲喜こもごものエピソードを語っていれば、夜通しネタは尽きない。

しかしそれらは何も表面的なことだ。外国語学部とりわけ英語専攻のもつ自由なあたたかい雰囲気は、そうした喧騒の真っ只中でも健在だ。今まで何とか務められてきたのも、権威主義とは縁のない外国語学部という場所に受け入れてもらったからだ。感謝を表す言葉もない。

大学とは何か。それは建物でもなく、厳しい看板やオベリスクなどでもな

い。学問という、インクの染みの上には存在しないもの磨き上げるために、時間になるとゴソゴソとどこからか人々が集まって懸命に語らい合う。そうした不可思議な人間の関係に他ならない。どれほど素晴らしい建物があり、どれほど深遠な書物があっても、所詮学問は人間と人間の絆から生まれる。

もしそうだとすれば、私は本当に素晴らしい大学に恵まれた。外国語学部そして英語専攻に集う人々が手を取り合ってこの類まれな絆を支え、次の百年も歩み続けることを心から願ってやまない。